

# 全てはウオッカから始まった

三浦敬介

## ●受賞のことば

文章を書き始めたのは2010年、あるスポーツライターと出会ったのがきっかけでした。それ以来、様々なジャンルの原稿を書きつづけてきた。その中で、さしたる反響を受けることもなく、これでダメなら諦めようとの思いで完成させたのが、この作品です。幸いにも佳作に選んでいただき、もう少し物書きを続けてみようという気持ちが湧いてきました。この判断が間違いないと言われぬよう、今まで以上に熱くスポーツと向き合っていこうと思います。

## ●プロフィール

1965年生まれ、東京都出身。大学卒業以来、一貫してテレビ業界に身を置き、現在は報道番組のディレクションを担当。週末には愛娘が情熱を傾けるバスケのビデオ撮影を義務づけられ、本馬場からは足が遠のきがちの日々。

マコトは顔中のパーツが弾け飛ぶ程の笑顔で喜びを爆発させていた。

平成29年5月28日。ボクは妻のヨシコに連れられて娘のマコトが通うT高校の体育館を訪れていた。T高校バスケ部が宿敵H高校を迎え撃つ練習試合に2年生のマコトも出場するからだ。

コート脇にパイプ椅子を並べただけの観客席。その最前列でかしまっているボクの気持ちは複雑だった。ひとり娘が出場する試合に興味を持っていないという訳ではない。しかしダービーの日と重ならなくても、15時20分。目の前の試合は接戦のまま佳境に差し掛かっているが、心ここにあらず。それがボクの正直な心境だった。

ダービーの発走時刻は一刻と迫っていた。いよいよ我慢できなくなってスマートフォンを取り出そうとした瞬間、体育館に大歓声が響き渡った。試合終了。T高校に勝利をもたらしたのはマコトの逆転シュート

だった。

コートの中で抱き合っている喜ぶT高の選手たち。先輩から手荒い祝福を受けている我が子の目には涙が見て取れた。観客席には自分がシュートを決めたかのように大騒ぎする母親もいる。夏フェスの1シーンのような熱気の中、ボクの脳裏に浮かび上がってきたのは、10年前にマコトと交わした『約束』だった。

平成19年5月27日。浅い眠りを引き裂いたのはリビングから聞こえてくる母娘の言い争い声だった。枕元の時計は7時。年に1度のダービーデイくらい安らかな気持ちで目覚めさせてほしい。それが偽らざる心境だった。重い足取りで辿り着いたリビングで目に入ったのは、ソファで体を丸めてすすり泣くマコトの姿だった。

4月に小学生になったマコトは仲の良い友達に誘われてバスケットボール部に入部していた。今日もそろ

「マコ、お馬さんの動物園に行こうか」  
名案が思いついたと自負するボクは、娘の返事を待たず外出の準備に取りかかった。

内馬場から見る競馬場の迫力は少女の想像をはるかに超えていたのだろう。どこまでも続く緑のターフ、視界を遮るものがない高い空、そして万里の長城のようにそびえ立つスタンドとそれを埋め尽くす大観衆。マコトは今までに見たことのない大パノラマに感嘆の吐息を漏らした。

「競馬場って、スゴイね」

マコ、驚くのはまだ早いよ。笑顔のボクは心の中でそうつぶやきながら、表情が少し柔らかくなってきた娘の手を取りパドックへと向かった。

ピロードのような皮膚を輝かせながら悠然と闊歩するサラブレッドの隊列に、少女は完全に魅了されていた。中でも3番ゼッケンの黒い馬にマコは引きつけられている様子だった。ボクはその馬が『ウオッカ』という名前で、第74回日本ダービーに出走する唯一の牝馬だということを手短かに説明した。するとマコは仔馬のようにつぶらな瞳をわずかに曇らせながらつぶやいた。

「ワタシといっしょじゃん」

ボクはポカーンと口を開けたまま動けなくなった。ワタシといっしょとは、どういう意味なのか。彼女を問い質すことができないまま時間だけが消費されていった。

本コースに比べればはるかに小さい楕円型の中を若駒たちは何周したのだろう。騎手を乗せ臨戦態勢に入った18頭の精鋭は気合充分に決戦の場へと向かってい

く。それを合図に本馬場へと急ぐ競馬ファン。ボクたちも黒い波の後に続きメインスタンドに移動した。

ガラス越しに広がる緑のターフとセルリアンブルーの空が織りなすコントラストは7歳の女の子が今までに見たどんな景色よりも刺激的で、それを取り囲む10万人規模の入場者が形成する人の壁は圧倒的だった。

世代のトップを決めるに相応しい舞台は十分に整っていた。ウオッカは女の子らしい優雅な所作でスタートの瞬間を待っている。マコは自らの抱える葛藤を全て託すかのような面持ちでウオッカを見つめていた。

ゲートが開く乾いた音を合図に第74回東京優駿の幕が切つて落とされた。序盤からガンガンやり合う男馬を尻目に、唯一の女の子は落ち着き払った足さばきで中団の最内にポジションを取った。マコは祈るように両手を握りしめ、レースの行方を見守っている。「男の子たちがみんなウオッカの前をふさいで意地悪してるよ」

我が子の目には、そう見えているようだった。もしかしたらマコも男の子に意地悪されているのだろうか。ボクは彼女の言葉が気になって競馬どころではなくなっていた。

レースが動いたのは馬群が4コーナーへと差し掛かった時だった。道中、虎視眈々とチャンスをうかがっていたウオッカは、満を持してアクセルを全開に吹かす。緑のじゅうたんのど真ん中を一気に突き抜けて先頭に躍り出た若き女傑は、17頭の牡馬を従えトップでゴール。出走馬の中でただ一頭の牝馬は堂々とした走りつづりで世代の頂点に立った。

野太い叫び声が交錯する中、ボクの耳に入ってきたのは聞き覚えのある声だった。

そろ練習に行く時間のはずだが、リビングにはそんな気配は微塵も感じられない。おもむろに口を開いたのは妻のヨシコだった。

「マコ、バスケ辞めたいんだって」

ソファでペソをかいているマコトは暗い表情で息を詰まらせている。

「今日は練習に行きたくないって言うの」

ヨシコは困り果てた表情で腕を組んでいる。嫌だったら休めばいい。それがボクの率直な意見だった。

これから先の長い人生を考えれば、1回休みなんて些細なことに過ぎない。ただ、あれほど楽しみにしていた週1回のバスケを休みたいだなんて、相当な理由があるに違いない。こんな時こそ父親の威厳を示さなくては。普段は子育てをヨシコに任せっきりだけに今回は何としても自分の力で解決したい。日本ダービー当日に勃発した大事件に際して、ボクが思いつく解決策はひとつだけだった。

「男の子たちが通せんぼしていたのに、ウオッカ、一杯がんばったよね」  
マコは少し涙ぐんでいた。そしてためらいながら、さらに言葉が続けた。

「ウオッカを見たから、もう大丈夫。ワタシこれから潤んだ視界が捉えた我が子は、ダービー馬の魂が乗り移ったかのように凛々しかった。」

娘と競馬に来てよかった。ボクは何度もうなずきながらマコの手を取った。握り返してくる力は思いの外強かった。

右肩に受けた強い衝撃がボクを現実へと引き戻した。「パパ、ねえパパ、早く撮ってよ！」

妻のヨシコが鬼の形相でボクの右肩を叩いている。どのくらいの時間が経過していたのだろう。目の前では大仕事をやり遂げたT高校バスケ部の面々を取り囲んで即席の撮影会が開催されているところだった。ボクも妻に促され、カメラマンの群れに加わった。フレームの中心にいるのは、もちろんマコだった。これも10年前、ウオッカに触発されたことから始まったのだ。高校2年生になったひとり娘は、あの日のことを覚えているのだろうか。ボクは一眼レフのファインダーをのぞきながら考えていた。

その時、カメラ越しにマコと目が合った気がした。ボクは驚いて尻もちをつきそうになった。マコの口が『ウ・オ・ツ・カ』と動いたように見えたからだ。ボクの中からポロポロと涙がこぼれ落ちた。そのしずくは、10年前とは比べものにならないくらい大きく、熱かった。

